

【原著】

近代英語成立前夜における類義性の問題

——*The History of Reynard the Fox*の法律用語の考察——

上 利 学

Synonymy at the Dawn of Early Modern English

——An Inquiry into Legal Terms in *The History of Reynard the Fox*——

Manabu Agari

16世紀近代英語期の入り口にあつて1476年英国に印刷術を導入して以来William Caxtonは、Chaucerなどの詩をはじめ多種にわたる英語作品と翻訳を印刷出版する。そこにはChaucer以降の古い英語と外国語から移入された新しい英語が混在し、ルネサンス期の豊かな英語を準備するが、古い英語も新しい中身を入れて再生する。本稿は豊かさの一面面である語彙の類義性が印刷術という新たな文化の中で如何に機能したか、中世から近代にかけて古い器がどんな中身を盛られたか、その要因は何か、これらの変化の問題をCaxtonの寓意物語において観察してみたい。

1481年に出版された*Reynard the Fox*において、「告訴する」を表す標準的な語は“complayne”及びその名詞形である“complaynt”である。「告訴する」という意味を持つ類義語全体の四分の三を占めている。若干例を挙げる。

ther was none of them alle but that he had **complayned** sore on Reynart the fox• (7.1-3)
Now **complayneth** Courtoys that he with payne had gotten a puddyng in the winter/
(9.28-29)

I **complayne** to yow mercyful lorde syre kynge/ (19. 10)

my lorde the kynge here oure **complaint**/ (30. 12, 強調筆者 以下同)¹

動詞の場合は、一例目のように前置詞“on”+人を伴う構造が圧倒的に多い。これはライオンのNoble王が聖霊降臨祭で法廷を開き、きつねReynardの悪行を訴えなかった動物はいなかったという場面である。そのほか二例目のように“complayne”が節を伴う場合、三例目のように与格構造を伴う場合がある。四例目は名詞の例である。

“Complayne”/“complaint”の類義語として出現する語には“playne”/“playnt”, “appele”, “appeche”, “charge”, “ley”がある。まず“playne”/“playnt”から検討する。これらの語は作品中、散発的に用いられている。中には“complayne”が連続して使用されている間に“playne”/“playnte”が挟まれている例も見られる。両者の使用を導いた要因は何であろうか。

これらの類義語の違いとしてまず考えられるのは意味の違いである。聖霊降臨祭で王が開いた法廷で多くの動物がReynardの悪行を王に訴える。狼のIsegrymは彼の妻の許可なく家に上がり込んで来たReynardが、子供に小便をかけ失明させたこと及び妻に対して破廉恥行為を働

いたことを王に訴える。同じように犬のCourtoysは厳しい冬に唯一手にしていた食べ物プディングをReynardに取られたことを、豹のPantherはReynardが野兎のCuwaertを騙してのどに食らいつき殺そうとしたことを訴える。彼らの訴えに対し、Reynardの甥である穴熊のGrymbertが弁護する。下記に該当箇所を引用する。

he **complaynteth** how that reynart myn eme hath moche trespaced to hym by cause of his wyf / Myn Eme hath leyn by her but that is wel seuen yer to fore / er he wedded her / and yf reynart for loue and curtosye dyde with. her his wille / what was that / She was sone heled therof / hierof by ryght shold be no **complaynt** were Isegrym wyse. he shold haue lefte that he doth to hym self no worshyp thus to sklaundre his wyf / She **playneth** not / now maketh kywaert the hare a **complaynt** also / that thynketh me a vyseuase / yf he rede ne lerned a right his lesson / sholde not reynard his maister bete hym therfore / yf the scolers were not beten ne smyten and reprised of their truantrye / they shold neuer lerne /

Now **complayneth** Courtoys that he with payne had gotten a puddyng in the wynter / at suche tyme as the coste is euyl to fynde (9. 16-30)

Grymbertは、Isegrymの妻に対するReynardの破廉恥行為は結婚前のことだと述べ (he complayneth)、彼が賢明であれば訴えるべきではない (shold be no complaynt) と言う。というのは彼の妻は訴えていない (She playneth not) からである。またKywartは些細なことで訴えており (maketh kywaert the hare a complaynt)、CourtoysがReynardに取られたと訴えている (complayneth) プディングはCourtoysが盗んだものであることを明かす。

二つの類義語の定義を確認してみよう。*The Oxford English Dictionary (OED)*は“complayne”を次のように定義している (“To make a formal statement of a grievance to or before a competent authority; to lodge a complaint, bring a charge.” (OED, s.v. Complain, 8.)). 一方の“playn”は次のように定義されている (“To make a complaint.” (OED, 4. b. intr.)). *The Middle English Dictionary (MED)*は多少細かく定義している (“To make a legal complaint or accusation” (MED, 2.)). 二つの語の定義はほぼ同じである。本作品では、告訴人は王の前で苦情を申し立てるときにはすべて“complayne”を使用している。引用中のGrymbertによるReynardの弁護には、“complayne”と“playne”との間に意味の違いは特に見られない。二つの語が使われている状況に違いがないため、両者の意味の違いや使用域の違いによる使い分けはないと思われる。それではなぜ“playne”が使われたのだろうか。

初期刊本の場合は、15世紀後半の印刷事情を勘案しなければならない。1481年に出版された *Reynard the Fox* はフォリオ版で組版印刷された。以下に組版印刷について簡単に説明する。一枚の全紙 (sheet) を二つ折りにすると4ページ分となり、全紙を四枚重ねて二つ折りにすれば16ページ分となる。外側ページは1ページと16ページから成り、内側ページは2ページと15ページから成る。印刷の際には2ページ分を一度に印刷機にかけるため、植字工は1ページと16ページを植字することになる。1ページから16ページまで順に植字すると16ページ分に相当する大量の活字が必要となるだけでなく、印刷工を待たせるという欠点がある。組版印刷では2ページごとに印刷機にかけるため少ない活字で済ますことができ、印刷工を待たせるという非効率性も避けることができる。組版印刷をする際に、Caxton又は印刷所の親方があらかじめページ見積もりを行い、各ページに収まる量のテキストを定めたのである (Blake (1976) 55-57)。

植字工は見積もられたテキストをページ内に収めなければならず、その際には省略記号、文字間隔の調整、異綴り、語の付加・削除などの手法が用いられる (Blake (1991) 282-3)。Norman Blakeは*Reynard the Fox*の調査を行い、ページ末で“and”の代わりにampersand “&”が多用されている事実をテキスト調整の例として挙げている (Blake (1976) 58)。Caxtonの印刷本に見られるテキストの調整については、彼が1485年に出版した*Le Morte Darthur*の研究に詳しく、Lotte Hellenga (1983: 92-94), Takamiya (1993, 1996), Kato (2002) が、特にページ末において、植字工には必要に応じてテキストの増減を調節する自由裁量があったことを証明している。テキストの調整はページ末以外の行末において行われることもある。例えば、行末に位置している“as”の文節を防ぐために、その語の直前に“aurenture”が用いられている例が挙げられる。このフランス形はラテン形である“aduenture”よりも一文字分短いために選択されている。また、行頭から“Thenne”で新しく文を始めるために、直前の行の末尾に“a(d)uenture”の省略形である“auētūre”が選択されたと考えられる例もある (Agari 69)。このように初期刊本の研究には印刷上の制約を考慮しなければならない場合がある。

本作品 (マイクロフィルム版) を調査すると興味深い事実が浮かび上がってくる。前後を“complayne”に挟まれていた“*She playneth not*”は行末に位置しているのである (a6, 9)。この事実、植字工が活字を組みながら活字の量とスペースを計算し、“*She playneth not*”が行内に収まる工夫をしたことを示していると考えられる。行末調整のために“playn”が“complayne”と同義で採用されたと言える。もちろん“complayneth”を使って行末の“not”を次の行頭に送ることも可能ではある。しかし、“*She playneth not*”は一つのまとまりのある意味単位である節を構成するだけでなく、Isegrimの訴えに関する話題の最後の部分を占めていることから判断すると、より短い類義語を使って行末調整を行ったと考える方が妥当であろう。事実、次の行からは話題がKywartに移っているのである。他の四例の“playne”のうち、二例についてもスペースの調整と密接に関連していると考えられる。

though reynart were now here. and he cleryd hym of double so many **playntes** yet
shold I brynge forth ayenst hym that he had forfayted his / lyf. (54. 32-34)
And yet he complayneth and I **playne** not / (65. 17)

最初の例では、Reynardが多くの訴えに対して二重に身の潔白を晴らしてもReynardの命はないも同然だということをIsegrimが述べているところである。二例目は穴兎のLapreenの訴えに対してReynardが弁明している場面で、Lapreenは彼自身に非があるのにもかかわらず訴えを起こしている一方、自分は訴えていないと都合よく話を歪曲している箇所である。いずれの場合も“playntes” (e8, 12) と“playne not /” (f8v, 2) が行末に位置している。² “Playne”の場合は、行末調整という印刷上の技術的な問題と関連していると言えそうである。

次に類義語“charge”を扱う。Reynardは自分に対して向けられた告訴に対しうまく言い抜けることによって王から赦免されるが、赦免後の王に対する冒瀆及び更なる告訴を受けて再度法廷に召喚される。Reynardは奸計を巡らせ、王に進んで奉仕しているが故に邪まな悪党たちが起こした告訴は、正義に反した謂われ無きものだとの弁を張る。彼の弁解には“complayned”と共に“charge”が使用されている (“And that ye my lord the kynge knewe as moche as / I doo / how I dispose me bothe erly and late in your seruyse / And therefore am I **complayned** on of the euyll shrewys and wyth lesynges am put out of your grace and consayte / and wold **charge** me with grete offencis wythout deseruyng ayenst al right /” (62. 35-63. 4)。OEDに

よれば“charge”は次のよう定義されている(“To lay blame upon, blame, censure; to bring an accusation against, accuse.” (*OED*, v. 15.)).「非難する」,「告訴する」という意味だが,“complayne”と違いがあるのだろうか。*OED*の定義では,“charge”は「非難する」と「告訴する」の両者の意味を包含している。この点では*MED* (4. (a)) も同じである。一方,“complayne”は「非難する」という意味も持ち合わせているが,「非難」「告訴」の二つの意味の境界線は明確であり別個の意味として取り扱われている。³

さらに二つの類義語の頻度にも違いが見られる。*OED*よりも用例が充実している*MED*を参照すると,“complayne”の用例が十四例あるのに対し“charge”は六例に過ぎない。両者を比較すると「告訴する」という意味においては“complayne”が一般的と言える。上記引用においてReynardは,告訴されたことに対しては“complayned”を使っている(彼が告訴された時には実際に“complayne”が用いられている)が,邪まな悪党たちが正義に反し不当な告訴を望んだというくだりでは“charge”を用いている。注目すべきは,悪党たちが実際に王の前で告訴する(complayne)前に不当な告訴を望んだ(wold)と言っていることである。Reynardの根底には,告訴自体は不当な理由を基にしているという認識があるのではないか。その認識に基づいて彼が「非難する」と「告訴する」という二つの意味領域が明確ではない語である“charge”を使用することによって,告訴という意味を薄める狙いがあったとの解釈が可能となる。告訴の意味合いが弱い語を策士Reynardが使っているわけだが,この語の使用者はすべてReynardと彼の親族である。

Reynardは王の前で弁明をするために出廷するが,途中,叔父のMertyneに会う。彼は,出廷が理由で悲しみに沈んでいるReynardに忠言を与える(“Thynge that toucheth **charge** ought to be gyuen in knowleche to frendis. A triew frende is a grete helpe. he fyndeth ofte better counseyl than he that the **charge** resteth on. For who someuer is **charged** wyth maters is so heuy and acombred with them that ofte he can not begynne to fynde the remedye.” (64. 24-28)). 忠言の内容は,告訴に関連することは,友に知らせればよりよいアドバイスを得ることが出来るというものである。Reynardの親族であり,同時に学識ある弁護士であるMertyneが,「非難する」と「告訴する」の意味領域が明瞭ではない“charge”を使ったことは示唆的である。

この語の使用者がReynardと彼の親族に限られているという事実は非常に興味深い。叔父のMertyneによる助言に勇気を得て法廷にやって来たReynardは,自分の取り繕いが通用せず旗色が悪くなったが,運良くその場に居合わせた彼の叔母であるRukenaweが助け舟を出す。法律に通じている彼女は王に対し,裁判官の役割を果たす際には怒りを抑えて良し悪しを見抜く眼識を持たなければならないと進言する。更に正義と法を超えて訴えてはならないと説く(“he shal **charge** none to whom he hath gyuen his saufgarde to aboute the right and lawe / the lawe ought not to halte for noman /” (69. 11-13)). 法律分野の専門知識に長け,Reynardの親族である人物による“charge”の使用は,Reynard一族の狡猾さを表していると思われる。

Reynardの一族による巧妙な用語の使い分けは他の類似表現にも見られる。叔父のMertyneに励まされたReynardは王に対し,もしこれまでに告訴されたことを除き,十分な証拠を持って彼を訴え証明することの出来るものがこの法廷にいれば,彼は法に従って罰を受けると王に伝える(“yf ther be ony in this court that can **leye on** me ony other mater wyth good witnesse and preue it as ought to be a noble man / late me thenne make amendes acordyng to the lawe /” (67. 9-12)). “Leye on”は「告訴する」,「責任を帰す」,「非難する」の何れかの解釈が考えられる。*OED*によれば前置詞“on”を伴う場合は何れの意味も可能である(“To bring

forward as a charge, accusation, or imputation; impute, attribute, ascribe (something objectionable). Const. *to*, *+unto*, *+against*, *+in*, *on*.” (OED, Lay, 27.); “To cast (blame, +aspersions, +ridicule) *on or upon*; also const. *+in*, *+to*.” (OED, Lay, 29.)).

MEDは「告訴する」という意味を“ayenst”が“lay”に後続する場合に限定しているものの、「責任を帰す」、「非難する」という意味についてはOEDと同じ立場を取っている (~ayen, to make (a complaint) against (sb.); ~on, cast (blame, scorn, slander, etc.) on (sb.), heap (praise) on (sb.), attribute (misdoing, fault) to (sb.) (MED, 8. (d))). これは“lay”が「告訴する」、「責任を帰す」、「非難する」の意味を包含していることを示している。(67. 9-12) の例では意味の特定は文脈に負っていることがわかる。つまり「他のどのようなこと」(ony other mater) は、これまでReynardに向けられた告訴を前提としていることが明らかであるため、一義的には告訴するという意味に限定される。しかし“lay”を使うことによって、Reynardは自らが告訴されるという可能性を否定すると同時に、「責任を帰す」や「非難する」というより弱い意味を意図することによって王を欺こうとしたとの解釈が可能となる。ここに奸智に長けたReynardの姿が浮かび上がってくるのである。

“Lay”に関する他の例はすべて“ayenst”を伴っている。次の例はこれもReynardの叔母であるRukenaweが王の前で彼を弁護しているスピーチである (“late reynard the foxe wel bethynke hym vpon thise maters that ye haue leyd ayenst hym / And yf he can not excuse hym / thenne doo hym right we desire no better /” (75. 10-13)). 彼女は、王が訴えてきた事柄をReynardによく考えさせ、もし弁明できなければ正しい裁きを受けさせるよう王に提言する。“Lay”は“ayenst”を伴うことにより「告訴する」という意味に限定されそうである。しかし告訴してきたのは動物たちであって王ではない。Rukenaweの“lay”の使用には、「告訴する」という解釈の余地を残しながら、「責任を帰す」や「非難する」という弱い意味をもたせることによりReynardの罪深さから王の目を逸らせようとする計算高さが見られる。

Rukenaweの言葉を受けて王の親族であるLupaerdも原告・被告双方の言い分を聞き、正義に従って判決を下すよう王に進言する。それに対し王は、怒りのあまり事を性急に運びすぎたことを認め、Reynardが訴えに対して申し開きをし弁明することができれば、喜んで彼を無罪放免にすると述べる (“I was sore meuyd whan I was enformed of kywarts deth and sawe his heed. that I was hoot and hasty. I shal here the foxe. can he answere and excuse hym of that is leyd ayenst hym. I shal gladly late hym goo quyte.” (75. 21-24)). 王はReynardがこれまでに受けた告訴を指す言葉として“that is leyd ayenst hym”を用いている。王自身は告訴に言及する場合は一例 (playnt: 12. 8) を除き、“complayne”/“complayntes”を使用してきたにもかかわらずである。Rukenaweの言葉を受けて、王が“leyd ayenst”を使ったことは明らかである。彼女の奸計が功を奏し、それにより王が懐柔されたことが王の言葉に象徴的に表れた瞬間だと言えよう。

Isegrymは、妻を騙して破廉恥行為に及んだこと、またIsegrymが彼の強欲さがもとで大怪我を負ったことを嘲ったことについては名誉に関わるとしてReynardを訴える。さらに彼が決闘を申し込むとReynardは了承する。決闘の最中、ReynardはIsegrymが無実の動物を殺し、彼に対しても不当な訴えを起こしたことに対して復讐をしてやると言い放つ (ye haue stole many a lambe and destroyed many a symple beest / and now falsely haue **appeled** me and brought me in this trouble / al this shal I now auenge on the / I am chosen to reward the for thyn old synnes” (99. 22-25)). 告訴するという意味では“complayne”の使用が一般的であった。その特徴は権威ある人物の前で正式に不満を述べるということであった (OED, 8.). そう

いう意味では上記の引用の中で“appeled”ではなく“complayned”が用いられてよいと思えくもない。*OED*は“appeled”を“To call (one) to answer before a tribunal; in Law: To accuse of a crime which the accuser undertakes to prove.”(*OED*, Appeal. +1.)と定義している。*OED*の定義で明らかなことは“appeal”が法律用語ということである。このことが意味する内容を検討してみよう。

“Appeal”とは、個人が告訴する場合の手続きを指し (Cam 70), 法に定められた定型表現を使って行われる (*Bracton* 406)。Appealには反逆罪, 殺人罪, 暴行罪, 強姦罪, 窃盗罪などに関する“appeal”があり (Russell 135-139), 通常は重罪の犠牲者が告訴人となる (Bellamy 1998: 35-36)。告訴人は, 身体によって, つまり, 決闘裁判によって告訴の内容を証明すると申し出る一方で (Bellamy (1973) 126), 訴えられた側は, 陪審裁判か決闘裁判を選ぶことができた (*Bracton* 385-6)。告訴人が決闘で負ければ投獄され, 偽りの告訴をしたとして罰せられた。被告人が負ければ処刑された (*Bracton* 386)。

上記引用中の告訴 (appeled) に至った過程をたどると, Isegrimは, Reynardから受けた侮辱や不名誉に対し, 彼の罪状を挙げた上で, Reynardは反逆者であり殺人者でもあることを身体によって証明すると宣言する (“I saye here to fore my lord and to fore alle them that ben here that thow art a false traytour and a morderar / And that shal I proue and make good on thy body wythin lystes in the felde. and that body ayenst body” (95. 30-33)). Isegrimが決闘申込みのために手袋を投げReynardが受諾すると, 王は翌朝決闘裁判が執り行われるよう手筈を整える。⁴このようにappealは手続きを含め, 個人による正式な告訴を指しており, 正式な告訴を通してのみ決闘裁判は行われるのである。

決闘を申し込まれたReynardには陪審裁判と決闘裁判のどちらかを選択する権利があるが, 彼は, Isegrimが足を痛めて弱っていることに活路を見出し, 決闘裁判を受け入れている (*Reynard the Fox* 96)。その一方でReynardが決闘裁判に賭けたのは, 陪審裁判では無罪放免になる可能性がないと判断したためとも考えられる (Hamil 255; Bellamy (1998) 41)。陪審裁判では, 当事者の評判に対する評価が重要な要素となっていたため, 数多くの悪事を働き, その点で告訴されているReynardにとっては極めて不利な状況である (Russell 142)。これはIsegrimが足を痛めて弱っていることと併せて, 計算高いReynardが決闘裁判を選択した理由と考えられる。

Appealが使用されている同様の例を検討しよう。これまでに働いた数多くの悪行で訴えられたReynardは, 法廷に出廷すると逮捕され, 絞首刑の判決を受ける。絞首台に連行され, まさに刑が執行されようとしたとき, Reynardは懺悔をし, 罪の告白をする許可を与えられる。彼はその中で, 彼がErmeryks王から盗んだ財宝が王の殺害に関連していたという話を仕立て上げると, 事の次第を明かすよう王と王妃に促される。彼は作り話の信憑性を高めるために, 最初に親族のGrymbertを訴える (“Now herkene how the foxe began. in the begynnyng he **appeled** grymbert his dere cosyn. whiche euer had holpen hym in his nede / he dyde so bycause his wordes sholde be the better byleued. and that he forthon myght the better lye on his enemyes” (35. 16-19)). 彼は, 首謀者である彼の父を中心として, Brun, Grymbert, Tybert, Isegrimがこの陰謀を企てていたと明かす。彼の父が盗んだ宝物の財力を使って王を廃位させ, 代わりにBrunを王位に即けるという陰謀である。この場面における“appeled”の使用も個人による正式な告訴を指している。

この場面における“appeled”は先ほど扱った“appeled” (99. 22-25) とは使われている状況が異なる。つまり先ほど扱った“appeled”は個人が被害を受けたことに対する告訴であるのに

対し、ここでの“appeal”は絞首刑に処せられる直前のReynardが、自分の身を守るために仲間の犯罪を告発している例である。告訴に関しては、反逆罪や殺人罪などに関する告訴があったことはすでに指摘した通りであるが、上記の例における告訴は、共犯者による告訴 (the approver's appeal) であると考えられる (M. J. Russell 149 ff.)。

共犯者私訴とは、反逆罪もしくは重罪で正式起訴された者が共犯者を告訴し、彼 (ら) が逮捕され有罪判決が下れば、国外追放となり絞首刑を免れるという制度である (Hamil 238)。この制度はHenry一世の治世に始まり、Henry二世の治世下の1156年には確立していたようである (Hamil 238-9)。共犯者を告訴するには、共犯者私訴人 (approver) はまず起訴された罪を告白し、次に仲間を訴えることになっていた (Hamil 240)。決闘で敗れたものは原告であろうと被告であろうと絞首刑となった (Hamil 246)。複数の仲間を告訴した場合は、少なくともうち一人が裁判を受けるまでは死刑が執行されることはなく、その間逃走や有力者の仲介を期待することもできた (Bellamy (1998) 41))。また刑の実行を遅らせるためにそれぞれ遠く離れた州にいる二人の重罪人を告訴する場合もあれば (Post 93)、多くの仲間を訴えた場合もあった。Mussonは、少なくとも47名の仲間を告訴した人物の例を挙げている (472)。また無実の人を告訴することもあったようである (Hamil 251; Russell 149)。延命のために共犯者私訴を行ったことは、その多くが裁判で訴えを取り下げたという事実が示している (Hunnisett 71)。共犯者私訴に対する不信感の醸成には役人が絡んでいることも大きい。シェリフや看守 (gaoler) が囚人に対し無実の人を告訴するよう強要し、被告人から告訴の取り下げや保釈と引き換えに金銭をゆすり取ることが横行した (Hamil 248-49)。このように、共犯者私訴に対しては一般に不信感を抱かれていたようである (Hunnisett 72-3)。

Reynardが共犯者私訴を行った主な理由は、目の前に迫った絞首刑を一時的に逃れることであることは明白であるが、この告訴には彼の狡猾さを示す要素が見え隠れしている。Reynardは無実の親族を告訴していることに加え、Isegrymの一族112名が関わっていたことを示す手紙にも言及している (*Reynard the Fox* 38)。告訴する人数が多ければ、彼らを探し出して逮捕するまでには相応の時間がかかる。判決を受けるまでの時間が長くなれば、逃亡や有力者の仲介等で命が助かる見込みも出てくるわけである。また、国王暗殺に関連する財宝が王の関心を引くことについては、Reynardは計算済みであろうが、王がReynardの反逆罪に関する告白を当てにせざるを得ない状況にあったこともReynardに有利に働いた要因ではないだろうか。つまり共犯者私訴は、犯罪集団を特定し、解体するという重要な機能を果たしていたからである (Hanawalt 36-7; Musson 474)。国王にとっての利点は、広範囲に散在する犯罪者集団を逮捕できること、共犯者私訴人に告訴された被告が共犯者私訴人となり犯罪者の逮捕に貢献できることにある (Musson 474)。Mussonは、国王が犯罪グループを摘発するために共犯者私訴を奨励したという可能性を指摘している (471 ff.)。特に、国王暗殺に関するような重大、かつ看過できない犯罪については、共犯者私訴による情報に頼らざるを得ない。このようにReynardは、犯罪者を一掃したい国王の立場に付け込むことができる環境にあり、実際にそうしたと言えよう。

Reynardは彼の父が地中に隠していた宝物を掘り出し別の場所に移し変えることによって国王廃位という謀略を挫いた旨を伝え、財宝に目が眩んだ王妃はReynardに対してなお不審を抱いている王に対し、以前は邪まな性格であったが、他の動物たちに責任を帰することができたにもかかわらず彼の父と甥を訴えた (appechid) ことを挙げ、今では改心したと言って王を説き伏せようとする (“my lorde ye may now well byleue hym / though he were here to fore felle / he is now chaunged otherwise than he was ye haue wel herde that he hath **appechid**”).

his fader and the dassé his neuwe / whiche he myght wel haue leyd on other bestes / yf he wold haue ben false / felle / and a lyar /” (39. 10-14)). Reynardが死刑宣告を受け絞首刑が執行される前に行った告白は、まさに共犯者私訴 (Approvement) に相当する。⁵ もう一例ある “appeach” も同じ状況で使われている。この裁判を傍聴していた大鳥の Tyselyn は Isegrym, Grymbert, Tybert のもとへ飛び、Reynard が赦免されたことに加え、彼ら 3 人が訴えられている旨を伝える (“The kynge hath skylled hym quyte of alle his brokes and forgyuen hym alle his trespaces and mysdedes / And ye be alle betrayed and **apechyd**” (42. 29-31))。

“Appeach” については、*OED*, *MED* 共に「告訴する」という意味しか与えていない。またグロッサリーも同様である (“bring a charge against”)。しかし二つの引用中の “apechyd” が共犯者私訴の文脈において使用されていることは明らかである。単に告訴するという意味ではなく、重罪を犯した者が延命を図って罪を認め、自分が情報を得ている犯罪人を延命と引き換えに告訴するという文脈における告訴という意味である。

ここで注目すべきは、共犯者私訴において “appeal” ではなく “appeach” が用いられていることである。この語は共犯者私訴と密接に関連しているため、両者の関係を探ることは有益であると考えられる。

13世紀には、陪審裁判が利用され個人による告訴が減ったため、決闘裁判は共犯者私訴によるものを除き時代遅れの代物となりつつあった (Hamil 255)。共犯者私訴は14世紀中頃まで一般的であったが (Russell 154)、15世紀初頭までには巡回裁判記録にはめったに見られなくなり、15世紀後半にはますます稀になって、15世紀の法廷記録からは姿を消した (Bellamy (1998) 40-42)。

決闘裁判が衰退し恩赦が共犯者私訴人にも広く与えられるようになったことにより、共犯者私訴の内容に変化が生じてきたようである。つまり、共犯者私訴人が告訴に成功したときの国外追放が恩赦に取って代われ、さらに告訴が成功しなかった場合にも恩赦が与えられるようになった。また、重罪人も共犯者私訴を求める代わりに、共犯者に関する証言を提供し王の寛大な措置に期待することが多くなった (Hamil 257)。これに関連して Bellamy は、共犯者を告訴するだけで恩赦が得られる形 (appeachment) は16世紀後半にはまだ初期の段階にあったと指摘している。

In the later sixteenth century the form of ‘appeachment’ was still inchoate yet one crucial element was very noticeable. This was that the approver only benefited if his accusation brought about the conviction of the person he had charged yet the ‘appeacher’ seems to have been pardoned merely for making the accusation of his confederates, not because his charge resulted in their conviction. (Bellamy (1998) 143)

共犯者私訴人は告訴した相手に有罪判決が下れば絞首刑を回避できたが、‘appeachment’ という形態では、‘appeacher’ は告訴した仲間が有罪判決を受けなくても告訴するだけで恩赦が与えられたようだ、という内容である。

共犯者私訴をした Reynard は、告訴されていた罪について王から赦免される (“The kynge toke vp a straw fro the ground / And pardoned and forgaf the foxe alle the mysdedes and trespaces of his fader and of hym also / yf the foxe was tho mery and glad it was no wonder / For he was quyte of his deth and was alle free and franke of alle his enemyes /” (39. 21-25))。共犯者私訴では、通常、被告人は決闘裁判か陪審裁判を選択しなければならな

い。また、原告は、被告人が有罪判決になった場合のみ絞首刑を免れることになっている。しかしReynardは共犯者私訴を行った直後に恩赦を受けている。Bellamyは共犯者を告訴するだけで恩赦が得られる“appeachment”の初めてのケースを1522年としているが（Bellamy (1998) 142）, *The Reynard the Fox*が出版された15世紀後半にすでに知られていたのではないだろうか。“Appeachment”に相当する場合にのみ“appeach”が使われているという事実は、「告訴する」の類義語が無作為に使用されたのではなく、当時すでに萌芽期にあった“appeachment”が作品に反映された証左であると言える。

“Appeach”が持つ意味合いをさらに考えてみたい。“Appeachment”は“approvement”と非常に似ているため、“appeach”には“approvement”に関連する意味が内包されると考えられる。すでに述べたことであるが、“approvement”には負のイメージが付き纏う。刑の執行の遅延を図って行われた無実の人や多くの仲間に対する告訴や、役人による汚職の横行などで共犯者私訴に対しては不信感が広まっていた。共犯者私訴は不誠実と悪意に基づいているため、たとえ行われたとしても被告人のほとんどが無罪になったのである（Musson 478）。“Approvement”が衰退し始める14世紀後半から、“appeachment”が生じ始める15世紀後半から16世紀にかけて新しい制度に移行しつつある中、“appeach”は共犯者私訴に纏わる否定的な意味合いを継承していたのではないと思われる。

以上観察した「告訴」の語彙は、すべて中英語期に移入されたフランス語系の古い語である。類義語の交代が印刷技術上の問題から生じたにせよ、それが可能な状態にあったということが重要である。その他の語についてもCaxtonは使い分けることができ、読者がそれを理解できる環境にあったと思われる。法律用語は中々変化を受けつけないと思われるが、それでも新語に依らず既存の語を用いながら社会の変化に対応しているのは、Caxtonの力量に加えて英語の持つ類義性という特質に因ると言えよう。人文主義運動に始まる近代化の活力が英国の文化全般に広がる直前に、英語本来の持つ類義性という歴史的重層性が本稿の観察において垣間見られたように思われる。

注

1. 使用するテキストは、Blake, N. F. ed., *The History of Reynald the Fox* EETS OS 263 (London: Oxford University Press, 1970)。
2. (playnt: 12. 8) 及び (playnte: 67. 35) は例外。両者とも行末調整とは無関係の場所に位置している。
3. 「告訴する」という意味はMED 4. (a)を、「非難する」はMED 3. (a)を参照のこと。
4. Bractonの説明では、最初に手袋を差し出すのは被告人である（386）。
5. 共犯者私訴は、作品中では判決が下り処刑前に行われているが、実際には判決が下る前に行われた（Hamil 239）。

テ ク ス ト

Blake, N. F. ed., *The History of Reynald the Fox* EETS OS 263 (London: Oxford University Press, 1970).
Caxton, William. *This is the table of the historye of reynart the foxe* [Westminster: 1481] [microfilm].

参 考 文 献

- Agari, Manabu. “Linguistic Layers in Caxton's Malory,” *Poetica*, 59 (2003), 67-77.
Bellamy, John G. *Crime and Public Order in England in the Later Middle Ages* (London: Routledge, 1973).
-----, *The Criminal Trial in Late Medieval England* (Toronto: University of Toronto Press, 1998).
Blake, N. F. *Caxton and his World* (London: Andre Deutsch, 1969).
-----, *Caxton: England's First Publisher* (London: Osprey, 1976).

- , "Manuscript to Print," in *William Caxton and English Literary Culture* (London: The Hambledon Press, 1991), 275-293; originally published in *Book Production and Publishing in Britain 1375-1475*, ed. by Jeremy Griffiths and Derek Pearsall (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), 403-32.
- Cam, Helen M. *The Hundred and the Hundred Rolls* (London: Merlin Press, 1930, 1963).
- Clanchy, M. T. "Highway robbery and trial by battle in the Hampshire eyre of 1249," in *Medieval Legal Records edited in Memory of C. A. Meekings*, ed. by R. F. Hunnisett and J. B. Post (1978), 26-61.
- Hamil, Frederick C. "The King's Approvers: A Chapter in the History of English Criminal Law," *Speculum*, 11 (1936), 238-258.
- Hanawalt, Barbara A. *Crime and Conflict in English Communities 1300-1348* (Massachusetts: Harvard University Press, 1979).
- Hunnisett, H. *The Medieval Coroner* (Cambridge: Cambridge University Press, 1961).
- Kato, Takako. *Caxton's Morte Darthur: The Printing Process and the Authenticity of the Text* (Medium Aevum Monographs New Series XXII, 2002).
- Musson, A. J. "Turning King's Evidence: The Prosecution of Crime in Late Medieval England," *Oxford Journal of Legal Studies*, Vol. 19, No. 3 (1999), 467-480.
- Neilson, George. *Trial by Combat* (1890: rep. New Jersey: The Lawbook Exchange, 2000).
- Post, J. B. "The Evidential Value of Approvers' Appeals: The Case of William Rose, 1389," *Law and History Review*, 3 (1985), 91-100.
- Pugh, Ralph B. "Some Reflections of a Medieval Criminologist," (Proceedings of the British Academy, Vol. LIX, 1973).
- Rorkasten, Jens. "Some Problems of the Evidence of Fourteenth Century Approvers," in *The Journal of Legal History*, 5 (1984), 14-22.
- Russell, M. J. "Trial By Battle and the Appeals of Felony," in *The Journal of Legal History*, Vol. 1, No. 2 (1980), 135-164.
- Takamiya, Toshiyuki. "Editor / Compositor at Work: the Case of Caxton's Malory," in *Arthurian and Other Studies*, ed. by Takashi Suzuki and Tsuyoshi Mukai (Cambridge: D. S. Brewer, 1993), 143-151.
- , "Chapter Divisions and Page Breaks in Caxton's *Morte Darthur*," *Poetica*, 45 (1996), 63-78.
- Thorne, Samuel E. ed., *Bracton: On the Laws and the Customs of England*, vol. 3 (The Belknap Press of Harvard University Press: Cambridge, Massachusetts, 1968).

—平成21年10月29日 受理—